

ひたちなか 埋文だより

51



壁画を守る 埋蔵文化財調査センターの隣に位置する虎塚古墳の石室には、ベンガラという赤色顔料によって、丸や三角形といった幾何学文様と大刀や弓矢を容れる鞍などの武器・武具類が描かれています。これらの文様は今から約1400年前に古墳人が描いた絵です。1973(昭和48)年に発掘調査で発見され、1980(昭和55)年から一般公開を開始し、現在も年間16日間の公開を行っています。公開開始からもうすぐ40年になりますが、その公開が続けられた背景には、発見時から継続して壁画の状態を丁寧に点検してきた歴史があります。

CONTENTS	埋蔵文化財調査センターのお仕事紹介 博物館実習	
	「私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—」 第1回 ヤジリ拾いから発掘へ (瓦吹 堅)	
	資料紹介 那珂湊反射炉跡採集の窯資料(続報) —水戸藩領内における近世窯業の一側面— (川口武彦)	
	横穴墓を歩く② 神奈川県横浜市 荇子田横穴 (柏木善治)	
	1ケース・ミュージアム 48 ひたちなか市の墨書土器	1ケース・ミュージアム 49 古墳時代のはじまり
	遺跡めぐり いわき市白水阿弥陀堂を訪ねて	ひたちなか市の遺跡④改訂版 那珂湊中学区編
	虎塚古墳花便り③ ミゾソバ	埋蔵文化財センターの日々 2019 前期 ほか

博物館実習

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターでは毎年、博物館実習生の受け入れを行っています。博物館実習は、大学生が学芸員資格を取得するためのプログラムの1つで、8月の中頃に埋文センターの実務の手伝いや、新しい展示の考案を7日間行います。

ここでは、実習ではどのようなことを行っているのか、今年の実習内容を基本に紹介していきます。

作業
→ 狭いケース内での



★ 展示ケースの清掃

展示ケースの中は閉じられていても、埃がたまっていきます。そこで1度遺物を全て取り出し、中のガラス板をきれいに拭いていきます。ケース内はとても狭いため、遺物を取り出すのも一苦労です。

様子
→ 重いガラス板を運ぶ



↑ 遺物を取り出す様子

★ 展示内容の更新

日々の研究成果を展示にも反映させるために、展示の更新を行います。今回は解説パネルの設置と遺物の並び替えを行いました。また、遺物のキャプションも作成しました。

様子
→ キャプション作成の



→ 場所と遺物を確認しながらの並び替え



↓実習生も一緒に体験



→ふるさと考古学の準備



★普及事業への参加

埋文センターが行っている考古学体験講座の「ふるさと考古学」に参加し、受講生たちのサポートを行います。実習生は体験講座と一緒に参加したり、子供たちの記録写真を撮影しました。

→作品と一緒に受講生の記録写真撮影



→虎塚古墳の劇に参加した実習生



★資料展示の制作

実習生が自分たちでテーマを決め、遺物の並べ方から、照明の当て方、解説パネルまでを作成し、特別資料収蔵庫の展示スペースに展示します。自分たちで考えるので、その年の実習生の個性がよく出ます。



遺物の決定



遺物の移動



照明の調節



遺物の展示作業

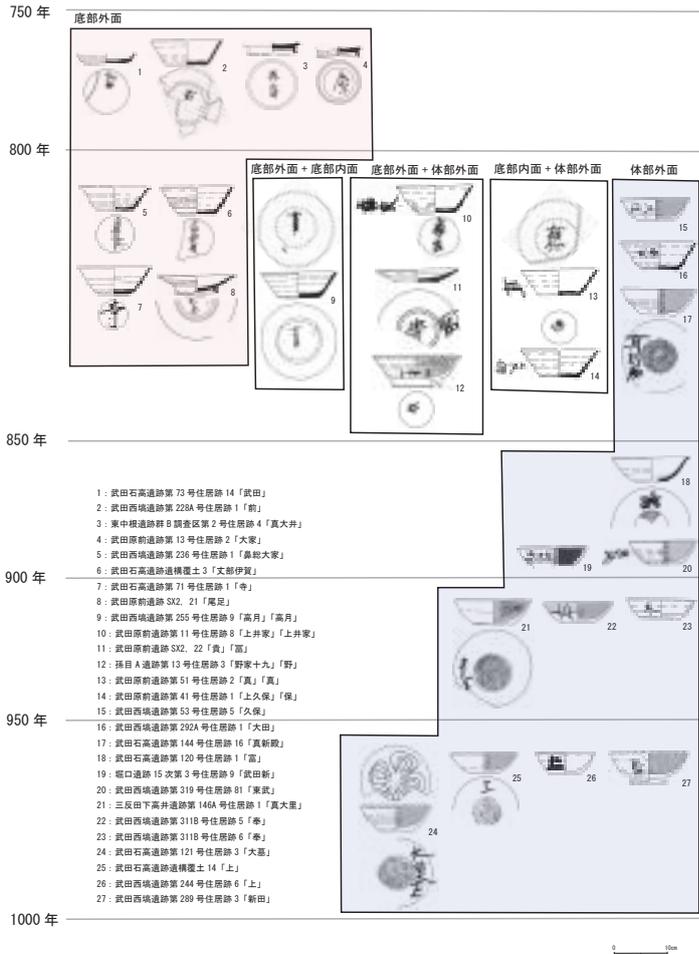


解説パネルの作成



完成!

ひたちなか市出土墨書土器の墨書位置の移り変わり



今回のワンケースミュージアムは、ひたちなか市の奈良・平安時代の集落跡から出土した墨書土器を展示しました。

墨書土器の研究に道筋をつけられた平川南氏は、墨書土器の本質について次のように述べています。「古代の墨書土器の本質は、一般集落においては、信仰形態に伴う記銘であり、官衙においても、饗宴などの儀式に伴う記銘と位置づけた。」（平川南『墨書土器の研究』より）つまり、ひたちなか市の集落跡から出土した墨書土器は、神へのささげものの際に、土器に文字を書いたものといえます。

ひたちなか市の墨書土器は、八世紀後半から十世紀ごろまでの集落跡から出土しています。役所や寺で働くことを通して文字を習得した人々が、地方の村々で筆や墨を使うようになるのが奈良時代ですが、そのころから村々で墨書土器がみられるようになります。当時の民衆のあいだには、冥界からやってくる鬼や

神々に賄いをささげることによって、災いを逃れたり、福を招いたり、延命を願ったりといった、道教的な呪術性の高い信仰が広まっていた。人々は村々で使われるようになった文字を利用して、祈願者の名前や、住んでいるところや、「富」や「福」などのめでたい言葉などを、棒げものの食物を入れた土器に記して、祈願者の願いを神々に知らせようとしたのです。

ところで今回の展示は、ひとつの試みとして「文字が書かれた位置」に着目してみました。墨書土器は、底部や体部など異なる位置に文字が書かれています。ひたちなか市の村々で土器に文字が書かれるようになる八世紀後半のころは、多くが底部外面に小さく文字が書かれています。それは地方の役所や寺に出仕していた人が、土器の底部外面に小さく所属などを記していた慣習を村々にもたらしたからと考えられます。それが九世紀前半になると、目につきやすい底部内面や体部外面に文字を大きく書くものが現れてきます。面白いのはその時期、底部外面と体部外面のように、二つの位置に書くものがみられることです。これは次の時期に向けての過渡的な様相といえます。そして九世紀後半以後になると、書いた文字が神々にはつきりと見えるように、体部外面に大きく記すものを中心になっていきます。古代の村々で、文字はこのように使われていたのです。

（佐々木義則）

二〇一九年度のひたちなか市埋蔵文化財調査センターの遺跡めぐりは、福島県いわき市の国宝白水阿弥陀堂と住吉磨崖仏を訪れました。五月三〇日当日はお天気に恵まれ、午前中は白水阿弥陀堂、午後はいわき市遍照院の住吉磨崖仏を訪ねました。

平安時代後期、極楽浄土をこの世に再現しようと、貴族・豪族によつて阿弥陀堂が日本各地に建立されました。

白水阿弥陀堂は、中尊寺金色堂（一一二四年）とともに、平安時代後期の阿弥陀堂建築として大変貴重で、早くも昭和四年には国宝に指定されています。

遺跡めぐり当日は、真っ青な青空と新緑に恵まれ、阿弥陀堂の伸びやかな屋根がとても美しいと感じました。

白水阿弥陀堂境域は、昭和三七七年の発掘調査で、橋跡・汀線・石組が見つかり、浄土式庭園の存在が明らかとなりました。

浄土式庭園は、宇治の平等院や、平泉の毛越寺などが有名ですが、白水阿弥陀堂の浄土式庭園も、日本を代表する史跡で、昭和四一年に国の史跡に指定されています。

その後、発掘調査を実施しつつ周辺の整備が行われた結果、現在のような素晴らしい庭園となりました。

白水阿弥陀堂の中に入ると、平安時代の優雅さを残す仏像が待っていました。中央が本尊阿弥陀如来で、その両脇が観世音菩薩と勢至菩薩です。

さらに外側に、持国天、多聞天の諸像が安置されています。当時、極彩色の堂内と金色の仏像は、平安時代の人々の目に極楽世界と映ったことでしょう。

小名浜で昼食をとってから、いわき市指定史跡の住吉磨崖仏を訪ねました。鎌倉時代（一二三世紀）頃と推定されている見事な石仏です。

遍照院の裏山の崖に美しい像容をみせる磨崖仏は、白水阿弥陀堂を生み出した、いわき地方の仏教美術の水準の高さを私たちに教えてくれます。

参加された方からは、普段訪れることができない、このような場所を見ることができてよかった、という声も聞こえてきました。

いわき市 白水阿弥陀堂を訪ねて



い庭園となりました。

白水阿弥陀堂の中に入ると、平安時代の優雅さを残す仏像が待っていました。中央が本尊阿弥陀如来で、その両脇が観世音菩薩と勢至菩薩です。

さらに外側に、持国天、多聞天の諸像が安置されています。当時、極彩色の堂内と金色の仏像は、平安時代の人々の目に極楽世界と映ったことでしょう。

小名浜で昼食をとってから、いわき市指定史跡の住吉磨崖仏を訪ねました。鎌倉時代（一二三世紀）頃と推定されている見事な石仏です。

遍照院の裏山の崖に美しい像容をみせる磨崖仏は、白水阿弥陀堂を生み出した、いわき地方の仏教美術の水準の高さを私たちに教えてくれます。

参加された方からは、普段訪れることができない、このような場所を見ることができてよかった、という声も聞こえてきました。

（佐々木義則）



今年四月一日から、(公財)ひたちなか市生活文化・スポーツ公社文化財調査事務所職員として勤務することになりました。なんと、新人職員は二年ぶりだそうです。

出身はここ、ひたちなか市。私が考古学に興味を持ったきっかけは、小学生の時にひたちなか市埋蔵文化財調査センターで、勾玉づくり体験をしたことです。それがきっかけで、大学は考古学が学べるころへ進学し、博物館実習でもここで世話になりました。その当時は、まさかここで働くことができるとは、夢にも思っていないませんでした。今では、地元で考古学に携わる仕事ができ、誇らしく、とても幸せだと感じています。

担当は旧石器時代から弥生時代。学生時代は古代を勉強していたので、まだまだ学ぶことがたくさんあります。埋蔵センターを訪れるみなさまに、ひたちなか市の遺跡の魅力をお伝えできるように、日々努力してまいります。

これからどうぞ、よろしく願います。

(田中美雪)



1 CASE MUSEUM Vol.49 公益財団法人 ひたちなか市生涯・文化・スポーツ公社

古墳時代のはじまり
— 三反田遺跡発掘調査の成果 —



令和元年
日時 7/27(土) 9/23(月・祝) 休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)
開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) **入場無料**

場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市中橋3-499 電話 029-276-8311

方形周溝墓の確認

調査では、古墳時代前期の住居跡一〇基と方

古墳時代は今から一七〇〇年前頃をはじめりとしていきます。市内でこの頃につくられた集落と考えられる遺跡が、三反田遺跡です。遺跡は三反田小学校敷地内にあります。三反田遺跡の住居跡からは、地元で使われていた「十王台式」という土器ではなく、「古式土師器」と称される他地域から持ち込まれた土器、またはその特徴を有する土器が多く出土しました。

三反田遺跡では一九九〇年の第5次調査終了後調査を行っていませんでしたが、三反田小学校の校舎建て替え工事に伴い、二〇一六年度の試掘調査(第6次)に基づき、二〇一七・二〇一八年度に調査を実施しました。その結果、ひたちなか市の古墳時代のはじまりを考える上で重要な成果がありました。

形周溝墓という墓を三基確認しました。三反田遺跡で方形周溝墓を確認したのは初めてです。方形周溝墓とは、溝を埋葬部分の周囲に方形にめぐらした墓で、弥生時代から古墳時代前期に造られます。墓の平面形は溝が全周するものと考ええます。規模は、三基ともほぼ同じで溝外周が13m前後、内周が10m前後を測ります。主軸は、第2・3号墓が同じで、第1号墓は異なります。遺構の重複は、第1号墓の溝が第2号墓を避けていることから、新旧関係は第2号墓が第1号墓より古いことになりました。また、第1号墓は第1号住居跡を掘り込んでおり、第3号墓は第3号住居跡を掘り込んでいることから、住居廃絶後に墓を築いたことになりました。

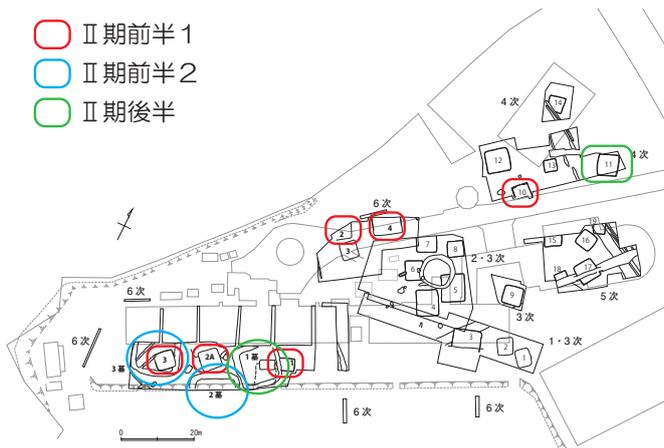
遺構の重なりや出土遺物から、方形周溝墓の時期は古墳時代前期前半の茨城土器編年Ⅱ期「谷仲他二〇一六」に比定できます。さらに踏み込んで時期を推定すると、壺の特徴から第1号墓がⅡ期後半で、第3号墓がⅡ期前半と考えました。

三反田遺跡のムラの変遷

今回確認した住居跡の時期は、古墳時代前期前葉の茨城土器編年Ⅱ期前半に位置づけられます。今回の調査成果から遺構の変遷を推定します

方形周溝墓という墓を三基確認しました。三反田遺跡で方形周溝墓を確認したのは初めてです。方形周溝墓とは、溝を埋葬部分の周囲に方形にめぐらした墓で、弥生時代から古墳時代前期に造られます。墓の平面形は溝が全周するものと考ええます。規模は、三基ともほぼ同じで溝外周が13m前後、内周が10m前後を測ります。主軸は、第2・3号墓が同じで、第1号墓は異なります。遺構の重複は、第1号墓の溝が第2号墓を避けていることから、新旧関係は第2号墓が第1号墓より古いことになりました。また、第1号墓は第1号住居跡を掘り込んでおり、第3号墓は第3号住居跡を掘り込んでいることから、住居廃絶後に墓を築いたことになりました。

- Ⅱ期前半1
- Ⅱ期前半2
- Ⅱ期後半



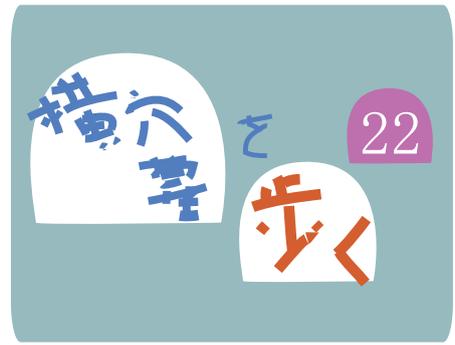
三反田遺跡遺構変遷推定図



三反田遺跡出土遺物の展示風景

と、茨城土器編年Ⅱ期前半に台地縁辺部を中心に住居が造られ、住居廃絶後同じ場所に墓が造営されます。Ⅱ期後半には住居は台地中央部に移り、縁辺部には引き続き墓が造営されます。このように、三反田遺跡は集落のない空白地域に「移住」という形で住居が建てられ、最初に建てられた住居廃絶後すぐに新しい墓制である方形周溝墓も造営されたことが判明しました。この事実から、ひたちなか市の古墳時代のはじまりでは、他地域の土器を使う人たちが集落をつくり、その後すぐに新しい墓制である方形周溝墓という墓もつくっていたことがわかってきました。

(稲田健二)



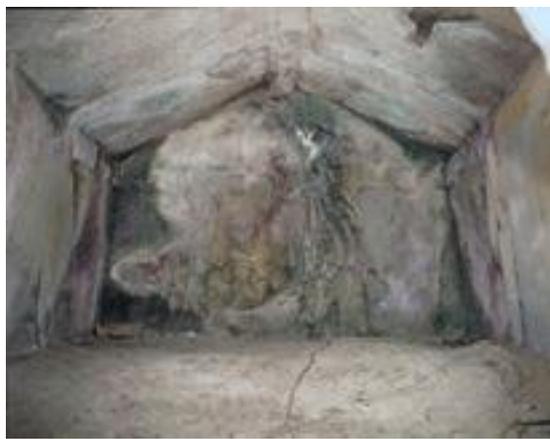
神奈川県横浜市青葉区
 荇子田横穴

柏木 善治

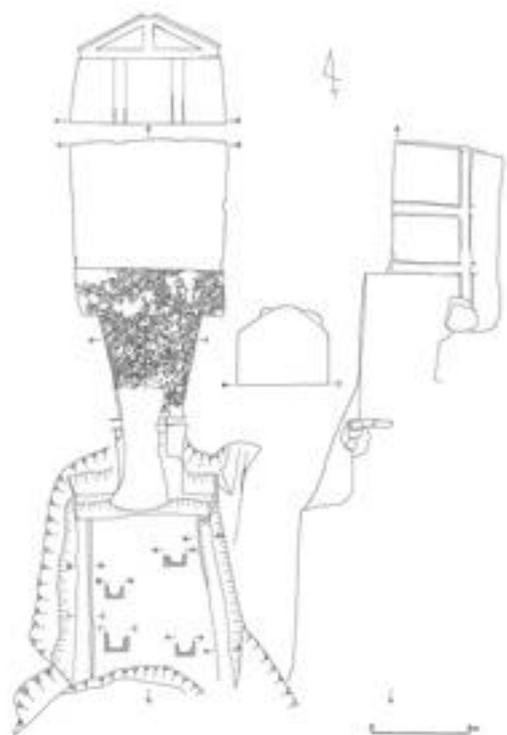
(公益財団法人かながわ考古学財団)

神奈川県と東京都下の境は、複雑に入り組んでいる。横浜市、川崎市、町田市といった市域には横穴墓が多数あり、横浜市青葉区に荇子田横穴（横浜市指定史跡）、町田市に玉田谷戸横穴墓群（東京都指定史跡）がある。これらはいずれも家形横穴墓である。ほかにも線刻画の描かれた、川崎市麻生区の早野横穴墓もあり、学史上の著名な横穴墓が集まっている。

荇子田横穴は一九二八（昭和三）年に学会に発表され、陽刻で家屋の内部が表現された切妻妻入構造の家形横穴墓であることが知られた。一九五六（昭和三一）年に発掘調査が行われ、一九八二（昭和五七）年には『横浜市史資料編』21として大塚初重氏により報告されている。それによると、横穴墓の主軸は南北軸で南向きに開口している。墓前域から見上げるように玄室が存在し、侵入を拒むような威圧感があって、墓前域と



荇子田横穴の玄室（横浜市教育委員会提供）



荇子田横穴の実測図（横浜市教育委員会提供）

玄室奥壁天井部分との比高差は四mにも達する。墓前域の構築は旧地形を掘り込んで、側壁は三mの高さを具えている。そこは一・五mほどの広さで、左右壁沿いには排水溝がある。一mほどの段差を上って羨道が延び、境を区切るように板石の門があることから、ここで閉塞されたものとみられる。この玄門から奥側に礫が敷かれているが、袖部分を越えても続いている。玄門と奥壁の間には高さ五〇cmほどの段差があつて、奥側の高い部分には礫が敷かれていない。玄室の壁を見上げれば、柱や桁、妻梁、小屋束、垂木、棟木が陽刻により精巧に表現されている。遺物は乱された土壌から小片が出土したようだが、詳細は不明である。

玄室の袖部分より奥側は一〇・八mで、高さが

二・二mという大きな空間になっている。規模の変化という視点からは、玄室規模が大きいことを評価すれば、七世紀前半という時期が該当しよう。埋葬施設に家屋という概念が取り入れられたのはいつであろうか。東アジアでは漢代の中国南部にある崖墓で家屋が表現されたものがあるが、日本列島では五世紀代の九州における横穴墓や地下式横穴墓が最初に導入した事例とみなせる。列島のいわゆる家形横穴墓は二種に分かれて、一つは壁と天井の境に切り欠きなどがあつて石棺の内部を表現したであろうもの。今一つは陽刻・陰刻や彩色により、柱などの表現で家屋内部を丁寧に模したものである。陽刻・陰刻によるものは南関東に多く、切妻妻入構造の代表例として、本横穴墓を挙げることができる。

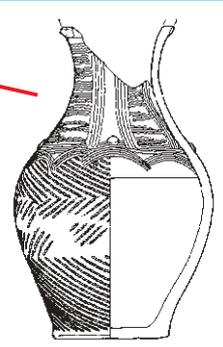


半分山遺跡の古墳時代の住居跡から出土した子持勾玉です。表面には、三角形やはしご状の文様が見られます。



船窪遺跡群は、台地上の船窪遺跡・半分山遺跡・ぼんぼり山遺跡と、低地の狛谷津遺跡の4つの遺跡からなる遺跡群です。発掘調査によって、船窪遺跡と半分山遺跡で弥生時代後期から平安時代の集落跡が、ぼんぼり山遺跡で弥生時代後期と奈良・平安時代の集落跡及び古墳が確認されました。また、狛谷津遺跡では埋没した谷が見つかりました。そこから出土した板材からは、弥生時代の人々の木を加工する技術の一端を知ることが出来ました。

形成された遺跡で1939年の山内...に「十王台式」した。



約 800 年前

平安時代



0 10cm

縄文時代の貝塚は大田房貝塚、これに重複する弥生時代の遺跡は柳沢遺跡と呼ばれています。縄文時代は、晩期の貝塚から釣針などの骨角器が出土し、注口土器が完全な状態のまま残されていました。弥生時代は、中期の集落跡が想定されます。管玉が副葬された土器棺墓も検出されました。

0 1 km

ひたちなか市の遺跡 4 (那珂湊中)

那珂湊中学区には、現在、77の遺跡がみつかっています。今回紹介する那珂川河口の地域的那珂湊第一小・第二小学区には、42の遺跡があります。この中には、縄文時代の小川貝塚や大田房貝塚、弥生時代の半分山遺跡、古墳時代の寺前古墳やぼんぼり山古墳、古代の船窪遺跡といった各時代の遺跡が存在しています。

遺跡の発掘調査は、市内でもっとも古い1930年代から行われており、2018年までに34回実施されています。1936年～1939年にかけて調査が実施された小川貝塚では、縄文時代の早・前期の土器や石器、動物の骨等を材料としてつくられた骨角器が出土しています。大規模な調査として、那珂湊中学校の東側に位置する船窪遺跡群があります。1997年～2001年の5年間の調査で、弥生時代から平安時代にかけての住居跡が155基確認されています。

2018年までに発掘調査された住居跡の数
 一小地区：17基 二小地区：167基
 合計：184基

2018年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)

- 一小地区：御所内Ⅰ遺跡、御所内Ⅱ遺跡、前方遺跡、道理山遺跡、道理山貝塚、柳沢十二所遺跡、大田房貝塚、小川貝塚、辰ノ口貝塚、御船蔵貝塚、八幡ノ上遺跡
- 二小地区：船窪遺跡、ぼんぼり山古墳、貉谷津遺跡、半分山遺跡、富士ノ上Ⅰ遺跡、富士ノ上Ⅱ遺跡、富士ノ上貝塚、東塚原遺跡、東塚原古墳群、浅井内遺跡



ぼんぼり山古墳は、直径約28mの海に向かって突き出た丘陵先端の地出して、古墳をつくっています。清葬施設があり、そこから副葬品として土器が出土しました。

寺前古墳は、墳丘長約50mの前方後円墳です。高さは、前方部が約1.5m、後円部が約3.5mを測ります。時期は墳形の特徴などから、古墳時代前期に想定されています。

北山ノ上遺跡は、独立丘陵上に形成されています。ここから採集された土器が、清野『日本先史土器図譜』第1巻の標本の1つとして掲載されました。



「考古学への興味はいつ頃からですか。」とよく聞かれるが、あまりはつきりとした感覚はない。強いて言えば、幼い頃のヤジリ拾いからだろうか。我が家の西側にあるウエンデー（北茨城市関本町上野台遺跡^{うえのだい}）の畑は、市内で最も広い縄文時代の遺跡で、初めての考古体験は祖父に教えて貰ったヤジリ拾いかも知れない。また、我が家には歴史好きの祖父が採集したヤジリや石斧・土偶などがあり、それらとの触れ合いも影響したと思う。

高校に入学後の一九六三年頃と思う。日本史の担当教諭は新任の橋崎伸一先生^{はしざきしんいち}だった。定かではないが橋崎先生の授業で、住んでいる地域の歴史レポートが宿題として出された。私は近くにある上野台遺跡やお城山城跡^{しろのまじょう}、石仏などについて写真を入れてレポートを纏めた。そのレポートが本棚から発見された。文体は稚拙で、内容は祖父が書いた文章のコピペ的なものだが、所々に文字の間違いや疑問点などに赤鉛筆で橋崎先生がチェックしている。高校時代はいつものヤジリ拾いはあまりしていない。当時流行出したフォークソングにもっとも興味があり、友人達とグループを編成して歌ったりしていた。高校二年の時に高鈴山への学年遠足があった。隣のクラスの本田君がもってきたテープレコーダーからビートルズの「抱きしめたい」が流れた。当時はかなり珍しかったテープレコーダーだったが、その曲に体が震えた。ビートルズは強烈で新鮮だった。その後、高校を無断欠席して友人とビートルズ映画を何度か見に日比

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第1回 ヤジリ拾いから発掘へ

プロフィール

1948（昭和23）年茨城県多賀郡関本村生まれ。
國學院大學史学科卒。1976（昭和51）年より
2008（平成20）年まで、茨城県教育財団・茨城県立歴史館勤務。現在、茨城キリスト教大学非常勤講師、高萩市歴史民俗資料館館長兼文化財専門、茨城県考古学協会会長。／主な著作「茨城の土偶」『東国の土偶』等。

流山市東深井古墳群
(1968年12月)



瓦吹 堅

谷へ行った。大学へ入学した一九六六年六月末、そのビートルズが来日し、武道館のステージに立った。生では見られず、テレビでその興奮したステージを見たことを記憶している。

上京してから市ヶ谷の母の妹宅に世話になっていた私は、考古学にもそれほど興味を示さず、居心地が悪かったわけではないが面倒好きで小うるさい叔母宅を半年で出る。転居先は大学の掲示板で見付けた高井戸。その部屋は、東京工業大学小川先生の離れの六畳で、家賃は月五千円だった。その離れには一年以上住んだが、その後大田区池上へ転居。これには発掘参加が極めて大きな契機だった。

我々が大学に入学した一九六六年頃から、全国的に大型開発が始まった。高速道路網整備に関する道路建設、郊外などでの大型団地造成などで、当時遺跡を発掘調査できる人も少なく、大学などへ発掘調査依頼が殺到した時代である。大学二年になると、研究室には発掘要員としてあちこちの遺跡から声がかかり、それは博物館関係授業の受講生に特に声掛けが多かったように思う。野田市立博物館館長下津谷達男先生、立正大学丸子巨先生、考古資料館の加藤有次先生^{かとうゆうじ}の授業に出ると、あの遺跡この遺跡と募集があった。最初は六月一日から約一か月行われた千葉県花見川遺跡^{はなみがわ}の調査に参加。詳細は覚えていないが、大型団地造成に先立つ調査だったと思う。担当は下津谷先生、丸子先生で、同級生宮崎一郎君^{みやざきいちろう}、鈴木宏子^{すずきひろこ}さん達と参加。

我々のほか、立正大学からは同学年の野尻侃・河地俊幸・福岡元君達が参加した。毎日トレンチ掘りが続いた。六月の太陽は紫外線も強く、顔は黒く日焼けし、そのうち皮が剥け出す。周りの先輩達からは恐怖のエンピ投げの特訓。エンピ投げとは土をスコップの形を崩さずに遠くへ投げる職人芸的な技術で、これが発掘の第一歩。連続百回投げはまだまだ序の口で、男子は最低五百回連続で投げ、恐怖の千回投げもあった。この特訓のお陰で、今でも形が崩れないこのスタイルだ。この調査で遺構の検出の仕方、平板測量の仕方、手スコ（移植小手）、鋤簾の使い方など多くを学び、次なる遺跡の発掘へと期待感が膨らんだ。この頃から数か所の遺跡発掘で同じ釜の飯を食い、最近まで交流していた山形県の野尻（二〇一三年八月逝去）、千葉県の河地（二〇一八年一月逝去）、同じく福岡（二〇一九年一月逝去）が次々と鬼籍に入ってしまった、哀しい限りだ。

同じ年の七月から八月上旬、千葉県東金市家の子古墳群の調査に参加。丸子先生が調査団長、立正大学院生の渡辺智信さんが調査主任で、初めて古墳測量を体験した。測量は知つての通りレベル・平板・箱尺・巻尺と最低四名掛かりで、四年太田令子さんが指導係。私は平板を担当し、いろいろと教えられた。太田さんは卒業後に渡辺さんと結婚されたが、測量当時は深めの帽子にサンングラスという迫力ある上級生という印象だった。この調査は、墳丘測量を始めとして横穴式石室の展開図

作成など、その後の発掘に役立つ実りの多い調査となった。私が茨城県立歴史館に勤務していた当時、調査主任だった渡辺さんは千葉県文化財センターに勤務されており、資料の借用などで無理を聞いていただいたり、いろいろお世話になったが、二〇一五年に七二才で鬼籍に入られ、令子夫人も同じ年に亡くなられた。



石岡市国分尼寺（1971年11月）

（後列：左から瓦吹，田宮一典，山下房子，吉野勢津子，北村誠）
（前列：左から伊東重敏，小木香）



「笑う埴輪」復活!?（遺跡めぐり）

那珂湊反射炉跡採集の窯資料（続報）

—水戸藩領内における近世窯業の一側面—

川口 武彦

茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」に隣接する山上門脇の斜面を歩いた際に、これまで報告されていない窯道具を採集しました。窯道具のうち、四ツ羽根天秤やタコハマと呼ばれるものは、第9代水戸藩主徳川斉昭が天保9（1838）年に借楽園の傍に開設した七面製陶所跡で出土しているものと酷似しており、拙稿（川口 2016）で報告した焼け歪んだ焼締陶器碗のような小形の焼物の焼成に使われたものと考えられ、那珂湊反射炉に耐火煉瓦を供給した登窯において焼物の焼成が行われていたことを裏付ける貴重な資料です。

はじめに

筆者は、以前に茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」さんじょうもん山上門脇の斜面において採集した焼け歪んだ焼締陶器碗やきしめと窯道具・耐火煉瓦片れんが・磁器片を報告し、那珂湊反射炉に耐火煉瓦を供給した登窯では焼物も焼成されていた可能性を指摘するとともに、窯道具を利用した耐火煉瓦の窯詰り方法について復元案を提示しました（川口二〇一六）。その後も現地踏査を幾度か重ねたところ、これまで報告されていない窯道具を数点採集したので、本稿ではそれらの資料を報告します。

那珂湊反射炉跡の位置と遺物の採集地点

那珂湊反射炉跡は、ひたちなか市釈迦町三二一に所在します（図1）。遺物を採集した地点は、那珂湊反射炉が立地する台地の北西斜面で、山上門をくぐったすぐ左手です。

採集した窯道具の特徴（図2）

1は靴を逆にしたような形を呈し、裏面と側面には布目圧痕、表面の平坦面には直径4cmほどの円形の剥離面がみられます。形状から肥前窯業圏で四ツ羽根天秤や十字形大ハマ・タコハマと呼ばれるものです。裏面の突出部には

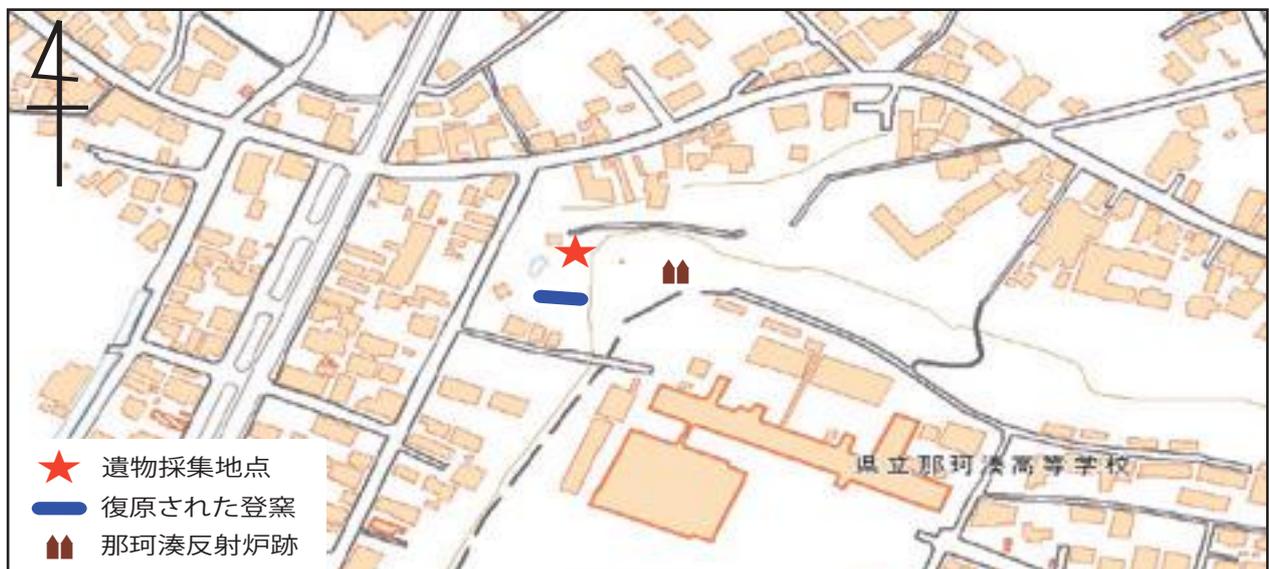


図1 遺物採集地点・那珂湊反射炉跡・復原された登窯の位置関係（地理院地図電子国土Webより転載・加筆）



図2 採集した窯道具 (S=1/3)

凹みがみられ、この部分に大型のトチンの平坦面を重ね合わせ、窯内部の空間を有効に利用したと考えられます。上面の平坦面にある直径4cmの剥離痕は前回報告した焼締陶器碗の高台径と近似することからこの部分に碗などを載せて窯詰めしたものと考えられます。胎土には黒色・白色・透明粒が多く含まれ、色調は灰白(2.5Y7/1)〜こげい黄(10YR5/4)です。現存長9.8cm、現存幅6.7cm、現存厚5.1cmで、類似する形状のタコハマは水戸市の七面製陶所跡から出土しています(図3)。

2は^{もみ}粉や植物繊維の圧痕が全面にみられるもので、上端がL字上に折れ曲がるのに対し、下

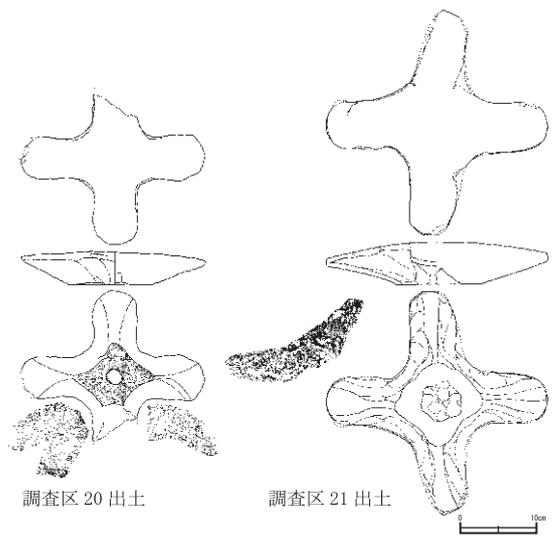


図3 水戸市七面製陶所跡出土のタコハマ (S=1/10)

端は平坦面となっています。全長9・4 cm、幅4・7 cm、厚さ2・7 cmで、色調は灰白（5Y8/1）にぶい黄（2・5Y6/3）です。規模や形状は異なりますが、粗や植物繊維の圧痕が見られる胎土目が、水戸市の囲裏窯跡でも採集されている、鉢などの焼成に使われたと考えられています（川口・関口二〇〇七）。

3は円柱状の体部の下端に円形の平坦面を持つていることから、肥前窯業圏で一般的にトチンと呼ばれるもので、耐火煉瓦の窯詰め使用されたものです。円柱部は焼け歪みにより折れ曲がっていて、平坦面には離れ砂の付着が見られます。胎土には黒色・白色粒が多く含まれ、色調は灰白（2・5GY8/1）、平坦面径4・5〜4・8 cm、円柱部径3・8 cmです。

4は耐火煉瓦の窯詰めの際に使用された円柱状の窯道具です。上下両端の平坦面には離れ砂の痕跡が残され、直径4・5〜4・8 cmで、厚さは4・2 cmです。以前に採集した耐火煉瓦にもほぼ同じ直径の離れ砂の痕跡が残されていたことから、耐火煉瓦の重ね焼ぎに使用された焼台と考えられます。表裏両面に打撃による剥離痕が観察されることから、耐火煉瓦に固着した際に叩いて剥がし取る行為が行われたと考えられます。胎土には黒色・白色粒が多く含まれ、色

調は灰白（5Y8/1）です。

おわりに

本報告では茨城県指定史跡「那珂湊反射炉跡」に隣接する山上門脇の斜面において採集した窯道具を紹介しました。窯道具のうちタコハマと呼ばれるものは、那珂湊反射炉に耐火煉瓦を供給した登窯において碗類などの小形の焼物も焼成されていたことを裏付ける貴重な資料です。また、タコハマの形状や大きさは、水戸市の七面製陶所跡で出土しているものと類似しており、那珂湊反射炉の建設に際して、水戸市七面製陶所、常陸太田市町田窯、栃木県那珂川町小砂等で焼物生産に従事していた在地の陶工たちの関与があったという指摘（渡辺二〇〇五）を裏付けるものと考えられます。登窯の遺構は現在のところ未確認ですが、近い将来に学術目的の発掘調査が行われることを期待します。なお、これらの採集遺物については、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターへ寄贈させていただきました。今後、那珂湊反射炉跡の調査研究の基礎資料等として御活用いただければ幸いです。

【謝辞】

本報告をまとめるに当たり、河野一也、瓦吹 堅、関口慶久の諸氏からは資料について有益な御助言を頂戴しました。御芳名を記して感謝いたします。

引用・参考文献

- 川口武彦 二〇一六 「那珂湊反射炉跡採集の窯資料―水戸藩領内における近世窯業の一面面―」『ひたちなか埋文だより』四四 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 川口武彦・関口慶久 二〇〇七 「水戸城下における近世生産遺跡の調査と課題―七面製陶所跡の調査を中心に―」『江戸遺跡研究会会報』第一〇六号
- 関口慶久・渥美賢吾・川口武彦・米川暢敬 二〇一七 『七面製陶所跡 遺構・遺物編 第一―三次発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 渡辺芳郎 二〇〇五 「幕末における耐火レンガ生産と在来窯業―薩摩藩・集成館事業の場合―」『金大考古』第四九号
- 渡辺芳郎 二〇一七 「窯跡資料からわかること―近世薩摩焼の焼成技術―」『やきものづくりの考古学―鹿児島島の縄文土器から薩摩焼まで―』鹿児島大学総合研究博物館

文の文 センターの日 2019 前期

4月

- 茨城新聞虎塚古墳取材 / 4ひたちなか市役所新人研修 / 4-7 虎塚古墳一般公開 / 6 水戸市ときわウオーキングの会見学 / 7 毎日新聞旅行見学 / 9-19 堀口遺跡試掘調査 / 11-17 岡田遺跡本調査 / 13-20 水戸市稲荷第一小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】 / 16 文化庁視察 / 17-18 御所内I遺跡試掘調査 / 19 日立市金沢小学校へ資料貸出【井上資料縄文土器ほか】 / 21 古墳見学会名古屋本部見学

5月

- 1-5 / 小玉秀成氏（小美玉市役所）資料調査（藤本資料） / 6 第16回企画展「縄文人と装身具終了」 / 8-28 西中根遺跡試掘調査 / 9 津田小学校6年



みどり野シニアクラブ

- 生社会科見学 / 14 牛久市東みどり野シニアクラブ見学（上段左写真） / 14-28 君ヶ台遺跡試掘調査 / 17 日立市金沢小学校より資料返却 / 22 中根小学校3年生社会科見学



- 22 富士見町ふれあいラジオ体操の会見学



- 22-24 東中根清水遺跡試掘調査 / 24 中根小学校6年生社会科見学 / 25 ワンケースミュージアム48「ひたちなか市の墨書土器―器の底に書く―」開始 / 28 石高遺跡試掘調査開始 / 29 外野小学校3年生社会科見学



6月

- 遺跡めぐり
- 一福島大学見学 / 4-7 黒袴遺跡試掘調査 / 5 石高遺跡試掘調査終了 / 11-14 東原遺跡試掘調査 / 12 田彦小学校3年生社会科見学



- 18-20 金上埜遺跡試掘調査 / 26 茨城大学出前授業【埋文センターの活動】

7月

- 2-5 市毛下坪遺跡試掘調査 / 3 茨城大学出前授業【虎塚古墳について】 / ワンケースミュージアム48終了 / 9-17 市毛上坪遺跡試掘調査 / 11 常陸大宮市美和公民館講座「古墳を訪ねる」見学



- 13 博物館実習施設見学【茨城キリスト教大学】 / 17 俳句の会見学 / 17-21 内手遺跡試掘調査 / 17-23 高井

虎塚古墳 花便り

23 ミソソバ

今回ご紹介する小さな花は、虎塚古墳の台地下の湿地に咲くミソソバ（溝蕎麦）です。ミソソバはタデ科タデ属の植物です。茎には下向きの刺があり、下部は地面に上部は立ち上がって直立しています。葉は鋸形で、茎と同じように刺があります。花は非常に小さく、上部が淡紅色で下部が白色の小花が10個くらいまとまっています。名前の由来は、溝に生えて葉や花の咲いた状態がソバに似ているからとされます。7〜10月頃に咲きます。

ミソソバと非常に似た花に、ママコソシリヌグイやウナギツカミがあります。二つとも奇妙な名前ですね。この三つを見分けるには葉の形を見るとよいと聞きました。葉の形からはミソソバだと思つのですが確認不足です。考古学の調査に携わるものとしては、この状況は失格です。反省！

（稲田健一）



2010.10.15

遺跡本調査 / 18 国立歴史民俗博

物館友の会見学 / 19 国営ひたち
海浜公園へ資料貸出 [沢田遺跡遺物] ほか

か / 20 ふるさと考古学①「楽しい
考古学」講師・さかいひろし氏」

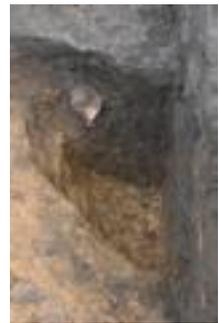


21 ふるさと考古学②「ひたちなか
市は遺跡がいっぱい」講師・さか
いひろし氏 / 23・24 阿字ヶ浦中
学校 2 年生職場体験



27 ワンケースミュージアム49「古
墳時代のはじまりー三反田遺跡発
掘調査の成果ー」開始 / 28 ふるさと
考古学③「遺跡ってなんだろ」
講師・佐古和枝氏 / 29 御所内
II 遺跡試掘調査開始
8 月
2 御所内 II 遺跡試掘調査終了 /
1 中央図書館子供ツアー見学 /

20-23 根崎 B 遺跡試掘調査



20-27 博物館実習 (茨城大学・筑波大学・
日本大学) / 24 ふるさと考古学④「虎
塚古墳の秘密!?」講師・さかい
ひろし氏 / 25 ふるさと考古学⑤
「虎塚古墳の秘密!?」講師・さ
かいひろし氏



28 群馬県立歴史博物館第100回企
画展『ハート形土偶大集合!ー縄
文のかたち・美、そして岡本太郎
ー』へ資料貸出 [三反田蝦蟇貝塚ハート形
土偶] (下段右写真)
9 月
31-30 寄居新田古墳群試掘調査 / 4
国営ひたち海浜公園より資料返却
/ 9 台風15号 (下段左写真) / 21 川口
武彦氏より資料寄贈 [那珂湊反射炉窯
道具] / 黒澤響氏 (茨城大学学生) 資料調

入館者状況 (2019.4.1. ~ 2019.9.30.)

月	開館 日数	個人		団体		計 (人)
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	1041	4 (0)	80 (0)	1121	
5月	27	256	8 (4)	410 (326)	666	
6月	26	135	3 (1)	188 (160)	323	
7月	26	178	6 (0)	155 (0)	333	
8月	27	312	11 (0)	113 (0)	425	
9月	25	144	1 (0)	30 (0)	114	
合計	157	2036	33 (5)	976 (486)	3012	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び
(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が
開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記の
ホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>



台風一過 (13日)



ハート形土偶群馬へ

杵馬渡埴輪製作遺跡埴輪 / 23 ワンケー
スミュージアム49終了 / 25-27 小
貫山遺跡試掘調査 / 26 猪狩俊哉
氏 (自立市郷土博物館) 資料調査 [十五郎穴
横穴墓群 / 35号墓資料] / 28 小林高氏 (千
葉市埋蔵文化財調査センター) 資料調査 [差
渡遺跡ほか弥生土器] / 29 ふるさと考古
学⑥「遺跡の考古学」(講師・堀江
武史氏)

編集後記の 虎の子

「さようなら」の次には「はじめまして」が
ある。今号から編集者が交替わりした。内容も
新たな連載や、新入職員による紙面も加わった。
当然のごとく表紙と編集後記も執筆者が変更と
なった。前任者の表紙や編集後記のインパクト
を引き継ぐのは私には到底不可能である。よっ
て初回は最も得意な虎塚古墳の石室に頼ること
にした。しかも、石室内に人物が写っている。
表紙でも触れたように、虎塚古墳の壁画は年
間一六日間しか見学することが出来ない。よっ
て、特別なことがない限り、石室内に入って詳
細な点検を行うのも公開日の前後となっている。
虎塚古墳の場合、壁画発見時から石室内に
人が立ち入ることを最低限の時間としてきた。
現在も年間四日間の点検作業で、石室内に人
が入る時間は三時間に満たない。
石室が一六日間しか公開されない代わりとし
て、センターには石室のレプリカを設置してい
るが、見学だ
けでなく、博
物館実習生な
どが壁画の点
検作業を体験
することも出
来るのであ
る。



博物館実習生の壁画点検体験



ひたちなか埋文だより 第51号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2019年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷